西念寺

丘と山が周りに幾つも重なっている。その盆地のようなのどかな田圃に、いずれの派にも属さない浄土真宗単立の別格本山の稲田山西念寺は建っている。別名稲田草庵。稲田禅房とも呼ばれる親鸞ゆかりの深い寺であり、欅の大木と杉の老樹の茂みに、昼なお暗い参道の尽きるところに、室町時代の作と伝えらる西念寺の茅葺屋根の楼門が参詣者を待ち受ける。

こじんまりとしたこの山門から境内を伺い息を呑んだ。目の覚めるような黄色で大地が塗り尽されていた。傍らにとてつもなく太い幹の老木が、荒々しく宙に向かって何本も枝を広げていた。天然記念物の「お葉つき銀杏」である。

山門をくぐると石畳の先に古色蒼然とした重層の屋根を持つ本堂が建っている。そばに後述する大覚寺のエピソードに関する弁円懺悔の桜、親鸞使用の杖が育った杖杉、鹿島明神が寄贈した神原の井戸など、親鸞の旧跡が配置され、本堂の奥に庫裡と４００人も泊れる宿坊があり、裏の丘には親鸞廟が静まり返っている。寺域2万坪もあるそうだ。晩秋に詣でると親鸞廟の辺りに燃えるような楓の葉が濃い常緑樹と澄み渡る空に映え、信心薄い人でも宗教心を揺さぶられる。

気安く本堂に上がり、ご本尊阿弥陀如来に合掌する。堂々とした外観、そして別格本山という格式高い寺院にしては、開放され親しみの持てる寺院であった。寺伝によると、

> 赦されると親鸞は宇都宮の一族である稲田頼重の招きによって、越後から常陸にやって来てこの地に草庵を結んだという。『親鸞伝絵』にも「聖人越後より常陸国に越えて笠間郡稲田郷というところに隠居したまう」と記し、親鸞がこの地に住んでいたことを明かにしている。

そして、親鸞はこの稲田の地を関東の人々に念仏を説く拠点とした。また52歳の

時、浄土真宗の根本聖典である『教行信証』を書いた聖地もこの地であるという。『教行信証』は教行信証の四法に真仏土と化身土を加えた6巻からなっている。正式には『顕浄土真実教行証文類』という。浄土の真実の教えを証明するための文集とでもいうのであろう。そして『教行信証』はそのほとんどが『大経』をはじめとして、色々な教典とか論釈からの引用でできている。いささか奇妙な本である。200頁もあるこの本の、書いた理由は何であろうか。仏恩の深さと御師法然聖人への恩に応ええるためのものという。

親鸞が上洛するに当たって、見送りに来ていた二十四輩第一番信性に、笈と共に『教行信証』を授けたという伝承がある。この真筆本は『坂東本』といわれ、現在国宝になっている。関東大震災の頃までは東京の上野にある坂東報恩寺にあったが、たまたまその時浅草の本願寺の金庫に納められて火災から逃れ、後に東本願寺に寄贈されたのである。そして坂東報恩寺に蔵されていたことから『坂東本』と呼ばれるようになったのである。

親鸞の著書は、その末尾に必ず年月日と親鸞が何歳の時に書いたという記録がある。ただし、『教行信証』にはそれがない。未完の書といわれる所以である。

親鸞は42歳から62歳頃まで、関東の地にあって勉学と布教に力を注いでいた。西念寺に身を置くと親鸞と恵信尼のことが思い起こされてくる。親鸞と恵信尼の住いは本堂辺りに建っていたといわれている。恵信尼は越後の豪族三善為教の娘というのが定説であるが、摂関家九条兼実の第7子の玉日姫であるという伝説もある。それを証明するかのように、西念寺の東南1kmの地に立派な玉日姫の廟がある。恵信尼遺徳顕彰のために全国的に玉日講が結成され、命日の9月18日以前のある日に西念寺で法要を営んでいるそうである。玉日姫の墓は、他に結城市の城跡のすぐそばにもある。

覚信尼は親鸞52歳の時の娘である。『教行信証』が成った元仁元年(1224)の生まれである。だから、親鸞が京に帰る時まで、覚信尼はこの地で兄姉に手を引か

れて遊んでいたであろう。草庵からは参詣者の念仏の声が朗々と漏れてくる。親鸞は筆を止め、恵信尼は畑の野菜を取る手を休めて、我が子の遊戯に目を細めいていたに違いない。親鸞一家にとって、稲田の草庵での生活が生涯最も幸せであったのではないかと思っている。親鸞一家の家庭団欒のほのぼのとした温かさが稲田にあったと感じるからである。

　常陸でおおよそ20年間布教した親鸞は、62歳の時一家を率いて、長く住み慣れた稲田の草庵を名残惜しげに、振り返り振り返り跡にして常陸を去っていった。西念寺のすぐ南の田圃の中に「聖人見返り橋」が記念として残されている。(新妻久郎)